

## 自分の感じたこと、思ったことを率直に発言することの難しさと大切さ

人間科学部、学医（精神科医） 小林 隆 児

日々講義をしていていつも思うことだが、うちの学生さんは実におとなしくもの静かである。私自身の講義のまずさであろうが、学生が自発的に質問や意見を述べることなど、在職四年間で指折り数えるほどである。ついつい私は学生に自分から近寄り、マイクを向けて発言を促すことになる。私は学生に知識の有無を問うことはしない。学生自身がいま何を感じているのか思っているのかを訊ねる。それでも大半の学生は言葉に窮する。というよりもマイクを向けられたこと自体への恐れを示す。身体を思わず引いて、隣の学生に助けを求めるように視線を送る。

私が担当する科目は立場上医学関連科目が多い。医学は実学である。もっとも大切なのは、人間を直接観察することである。そのため私は学生によく録画ビデオを見せる。それを見てどのような感想を持つかを訊ねる。感じたことをありのままに述べればよい。しかし、いざ経験してみるとすぐにわかるが、これがなかなか難しい。感じることはいろいろだが、いざそれを言葉にすることは難しいからである。

講義ではどうしても話し言葉をはじめとする視聴覚情報を駆使して教えようとする。実験や観察などを通して行われる講義との違いは明白である。学生が最初に目にするものが生身の人間観察か、それとも教授からの情報か、どちらを先に経験するかによって、教育の意味合いは大きく異なる。たとえば、精神医学で「発達障碍」とはどのようなものを説明しようとする。教科書にあるような解説をしたでしょう。その時はわかった気になるかもしれないが、実体はまるでわからないままである。このことは学問すべてにおいて言えることなのだが、まずは実体をありのまま捉え、観察し、そこにどのようなものを感じ取るか、それが先決である。何かを観察すれば、観察する人それぞれ目の付け所が異なるから、感じ考えることも異なる。このことが学問をする上でとても重要なことなのだ。

冒頭で述べた講義である学生にマイクを向けた時である。その女子学生はつぎのように自分の気持ちを正直に吐露してくれた。「正解があるような質問だと答えやすいのですが、そうでないから答えにくいです」と。私は彼女の発言を聞いて少なからず衝撃を受けるとともに、教育についてある確信を抱くようになった。彼女の発言は今や学生の多くが共通に抱いている思いだと悟ったからである。

学問の世界を眺めていると、ついこの前まで常識とされていたものがそうではなくなる。精神医学の世界でも同様である。何かの知識を学生に授けることについつい重点が置かれやすいが、私はそんな教育はもはや弊害の方が多い時代になったと思っている。学生一人一人が自分自身で物事を観察し、自分の頭で考える。そんな学習経験の積み重ねの大切さである。

子育てをみればすぐにわかることだが、子どもを育てる営みでもっとも大切なのは、子どもが今何を感じ考えようとしているのか、そのことをわれわれ育てる者は感じ取り、それにふさわしい言葉で語りかけることである。泣くだけしか能のない赤ちゃんにわれわれは「おなかがすいたのね、はいおっぱいあげるよ」と語りかけながら応じている。そこで養育者はいま泣いている赤ちゃんの気持ちを感じ取って言葉で返している。それが赤ちゃんの自分への気づきにつながり、生きた言葉を獲得することになる。

子育てに限らず、人生の先達者が後輩に教える際の基本原理はすべてこのことに象徴される。学生がどのようなことに関心を持ち、どのようなことを感じながら、考えようとしているか、そのことを知らずして、よかれと思って大切な知識をただ一方的に授けることに汲々としていたとしたらそこにどのようなことが起こるのであろう。自分の頭で考えることはせず、大切と言われた知識を覚えることにエネルギーを割くことになる。そのような教育の弊害を先の女子学生の発言から私は感じ取ったのである。

子育てと学生教育の基本原理は同じである。その人の主体性を大切に育てることに尽きる。